

■原著

夜間せん妄において表出された自発書字における語間代

—意識障害の類型論と関連づけて—

兼本浩祐* 安部隆二**

要旨：低肺機能と関連して夜間せん妄を起こした女性において、夜間せん妄の最中に自発書字が行われ、その際に著しい反復言語（語間代）が観察された症例を報告した。この症例で書き残された書字を、Chédru ら（1972）の挙げた意識障害時の書字の特徴と比較することを通して、①反復されている文字が単語の最後の2～3文字である点、②実詞ではなく助動詞や用言の語尾が反復されている点が、Chédru らと共通する点であり、他方で、③語間代という形での語句の反復が最も多い場合には20回以上にも及ぶ点、④語句の反復が時に統辞規則を破って出現した点は、彼らの症例よりも重篤な障害を示唆していた。これらの結果から、混濁意識（せん妄）と異化意識（もうろう状態）における精神運動性解体の相違について若干の考察を行った。 神経心理学 9；167～171

Key Words：夜間せん妄，反復言語，書字，意識障害，語間代
nocturnal delirium, palilalia, writing, confusion, logoclonia

I はじめに

Jaspers (1913) が提唱した意識障害の三類型（昏蒙 “Benommenheit”，混濁意識 “getrübttes Bewußtsein”，異化意識 “verändertes Bewußtsein”）は、それ以降のドイツ語圏内での意識障害の類型論の雛形となったが、意識障害の際に神経心理学的な検査を行った報告は、検査に応じうる枠組みが残存している「昏蒙」か「異化意識（もうろう状態）」に該当する状況における場合がその大部分であり（Chédru ら，1972a；Curran ら，1935；Gubermann ら，1986；Paterson ら，1944），「混濁意識（せん妄）」に関しては、そういった神経心理学的介入を意図的に遂行することは構造的により困難である。しかしながら、Chédru ら（1972a）も指摘しているように、神経心理学的介入の困

難なより深い意識の解体を被っている状態において、どのような神経心理学的表出が観察されるかは、それ故に一層、興味深い主題である。今回、我々は、気管切開のために通常筆談によって意志疎通を行っていた女性患者が、夜間せん妄中に自発的に残した筆談の内に、語間代を特徴とする著しい言語表出の変化が観察された症例を体験した。本稿では、この書字の特徴を、Chédru ら（1972b）の指摘する acute confusional state における書字機能の障害の特徴と比較するとともに、意識障害の類型論に関して若干の考察を試みた。

II 症 例

61歳，女性

1. 既往歴

23歳時，肺結核にて入院，化学療法で軽快。

1993年4月5日受理

Logoclonia Induced by Spontaneous Writing in a Case with Nocturnal Delirium

*国立療養所宇多野病院関西てんかんセンター，Kousuke Kanemoto：Utano National Hospital, Kansai Regional Epilepsy Center

**国立療養所宇多野病院胸部外科，Ryuji Abe：Department of Thoracic Surgery, Utano National Hospital

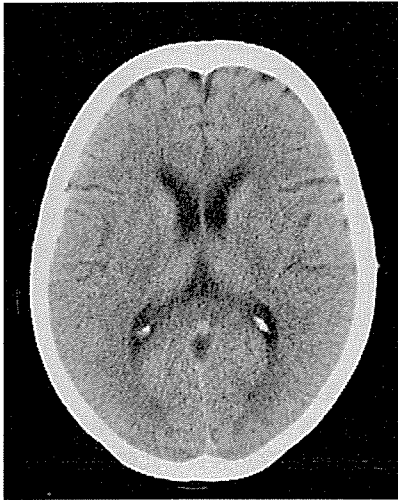


図1

54歳，56歳時，肺真菌症にて入院，化学療法で軽快。60歳時，再び呼吸困難で入院，化学療法にて症状軽快しないため空洞除去術を行う。最終手術日は，本年7月6日。

2. 検査所見

末梢血・一般生化学検査では，軽度の好酸球血症とアルカリフォスファターゼの軽度上昇を除いて特記すべき所見なし。梅毒検査も陰性であった。

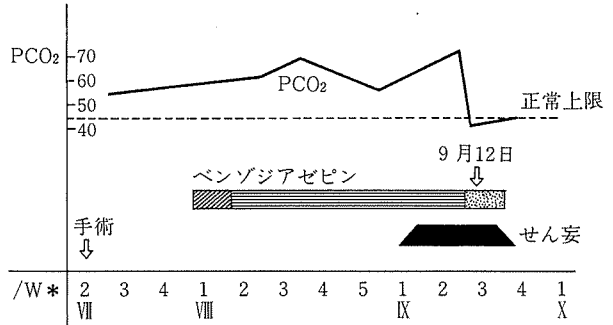
3. 放射線学的所見

CT (図1) では萎縮もなく，特記すべき所見はみられない。

4. 臨床経過 (図2)

手術後，7月末より強い不安感が出現し，そのため，benzodiazepine 系の抗不安剤 (7月29日～8月5日までが diazepam, 8月6日～9月13日までが fludiazepam, 9月14日～9月18日までが etizolam) が投与されていた。8月3日～9月9日の PCO₂ の値は55～75の間を推移し，常に正常上限を超えた値を示していたのに対して，PO₂ の値は酸素投与量の多寡に従って40～100の間を上下し，正常域と異常域の間で揺れていた。9月10日の時点で始めて PCO₂ の値は正常化し，42となっている。

精神症状に関しては，9月1日，23時30分に，「助けて，隣のベッドに人が3人いる」と非常に不安そうに訴えたのを皮切りに夜間せん



* 各数字は各月の第何週かを表す
 ■ diazepam
 ▨ fludiazepam
 ▩ etizolam

図2

妄が起こり始め9月6日0時15分には，鉄で酸素の管を切ってから，病棟内の廊下を徘徊し，「ソーメンを食べる」と言っていたのが観察されている。その後，ほぼ数日に一度の頻度でこのような夜間の幻覚と異常行動が繰り返されたが，せん妄中の言動について本人は翌日には健忘を残していた。このような経過中に，9月12日5時20分に，下記の書きつけが筆談の最中に残された。benzodiazepine の中止と血液ガスの補正によって，9月20日前後には，夜間せん妄は消失し，それ以降は若干うつ気味であるが落ち着いた状態となっている。

5. 夜間せん妄の際に書かれた文章 (図3)

〇〇さん，〇〇さん，しんぼしんぼしんぼしんぼ
 口からぶくぶくあわおだし
 くるしくてとてもつらくて
 くるしくて胸がくるしくてたましくて
 たまたままりまりまりまりまりまり
 まりまりまりまりまりましましまりまり
 まりまりままりまりまりまりまり
 大分がお大に大じにすることもわかり
 まりまりま

III 考 察

本症例は，肺機能障害による血液ガス値の悪化と，benzodiazepine による覚醒度の低下の二つの要因が重なって，夜間せん妄が生じてきたと考えられる症例であり，せん妄のない時期

りの隔たりがあるのではないかというのは、臨床的には偽らざる実感であろう。

我々が多数の複雑部分発作後のもうろう状態において行った簡易な神経心理学的検査においては(兼本, 1991), 口頭言語と書字言語という違いはあるとはいえ, 2回以上の単語ないしは音節の反復を示した持続性保続は認められなかったし, さらに, 「くるしくて」→「たましくて」にみられるように, 統辞的法則を破って保続が再現したような症例は観察されなかった。このことから考えると, 夜間せん妄を示した本症例において観察された語間代様の現象は, 複雑部分発作後のもうろう状態において我々が観察した保続よりもその障害度は重篤であった可能性が高い。せん妄状態の方がもうろう状態よりも, より深い機能解体に対応しているというこの推論は, 複雑部分発作後のもうろう状態においては, 例え個々の課題をこなすことはできなくても, 検査に応ずる枠組みが発作直後を除いては保たれていることが多く(兼本ら, 1991), これに対してせん妄状態においては, 検査に応じる構え一般が既に欠如しているという臨床的体験に一致するものである。

それでは, せん妄状態ともうろう状態の相違は, 機能解体の深さの程度に還元されるのだろうか。Binder (1936) は, Jaspers の意識障害の三類型の解剖学的基盤に関して, 昏蒙に関しては, 大脳皮質の系統発生的に最も新しい層から脳幹へと解体が次第に下降していくジャクソニズム的な解体を想定しているのに対して, せん妄に関しては, 脳幹障害が一次的でこれが大脳皮質に二次的に及ぶという上行性障害を想定している。そして, もうろう状態に関しては, 「脳幹の覚醒・睡眠中枢と大脳皮質によって構成される植物神経性機能環の交感神経部分」の機能低下を想定しているが, ここで想定されている構造の大脳皮質の部分は, 大脳辺縁系と重なり合うような構造であることが推測される。すなわち, Binder は, 意識障害の一次的な解剖学的基盤として, 昏蒙に対しては大脳皮質を, もうろう状態に対して大脳辺縁系を, せん妄に対しては脳幹を, それぞれ対応させている

とも言い換えることができよう。

濱中(1986)は, 反復言語(波多野ら, 1987)を, 錐対外路症状, 仮性球麻痺, 皮質巣病巣の三つの要因がさまざまな割合で関わる病態として据えているが, 著しい反復言語を認めた症例の多くは, び慢性の病変, すなわち, 一種の均一性解体を随伴している。せん妄状態は, 言うまでもなく均一性解体である。本症例におけるような夜間せん妄での著しい反復言語の出現は, せん妄状態ともうろう状態との症候論的な相違が, 単に精神運動解体の深さの違いではなく, Binder が指摘しているような, せん妄状態ともうろう状態とで一次的に障害される解剖学的構造の差異と関連している可能性も視野に入れておく必要があるだろう。

文 献

- 1) Binder H : Über alkoholische Rauschzustände. Schweiz Arch Neurol Neurochir Psychiatr 35 ; 209, 1935 & 36 ; 17, 1936 (cited in 濱中)
- 2) Chédru F, Geschwind N : Disorders of higher cortical functions in acute confusional state. Cortex 8 ; 395-411, 1972a
- 3) Chédru F, Geschwind N : Writing disturbances in acute confusional states. Neuropsychologia 10 ; 343-352, 1972b
- 4) Curran FJ, Schilder P : Paraphasic signs in diffuse lesions of the brain. J Nerv Ment Dis 82 ; 613-636, 1935
- 5) Guberman A, Cantu-Reyna G, Stuss D et al : Nonconvulsive generalized status epilepticus : clinical features, neuropsychological testing, and long-term follow-up. Neurology 36 ; 1284-1291, 1986
- 6) 波多野和夫, 長峰隆, 笠井祥子ら : 反復言語 palilalia について. 精神医学 29 ; 587-595, 1987
- 7) 濱中淑彦 : 臨床神経精神医学—意識・知能・記憶の病理—。医学書院, 東京, 1986
- 8) 原田憲一 : 意識障害の臨床的分類. 総合臨床 16 ; 2474, 1967
- 9) Hécaen H, Dubois J, Marcie P : Aspects linguistiques des troubles de la vigilance

- au cours des lésions temporales antérointernes droite et gauche. *Neuropsychologia* 15 : 311-328, 1967
- 10) Jaspers K : *Allgemeine Psychopathologie*. Springer, Berlin, 1913
- 11) 兼本浩祐 : 複雑部分発作後のもうろう状態における言語性保続—言語性保続の各類型と錯語型の相関関係—. *神経心理* 7 : 214-221, 1991
- 12) Kanemoto K, Ohigashi Y, Hadano K et al : Verbal perseveration and related disorders in primary degenerative dementia. *Studia Phonol* 20 : 33-37, 1986
- 13) Lipowski ZJ : Delirium, clouding of consciousness and confusion. *J Nerv Ment Dis* 145 : 227-255, 1967
- 14) Paterson A, Zangwill OL : Recovery of spatial orientation in traumatic confusional state. *Brain* 67 : 54-68, 1944

Logoclonia induced by spontaneous writing in a case with nocturnal delirium

Kousuke Kanemoto*, Ryuuji Abe**

*Utano National Hospital, Kansai Regional Epilepsy Center

**Utano National Hospital, Department of Thoracic Surgery

We reported a female patient with nocturnal delirium caused by the pulmonary dysfunction. The computerized tomography revealed neither local lesion nor diffuse atrophy in the brain. Because of the tracheotomy, the patient was compelled to write for the communication with others. In one of these confusional states, the patient left written material.

The writing was characterized by logoclonia composed exclusively of the last few letters of phrases. In agreement with the writings in acute confusional states described by Chédru et al.

(1972), small grammatical words and endings of verbs were affected. In contrast to the previous description, however, the phrases in question repeated themselves even twenty two times at their maximum ; the phrases perseverated even at the expense of syntactical rules.

From these findings, we suggested that the cognitive function in the nocturnal delirium was impaired more deeply than that in other types of the productive confusional states such as twilight states (Dämmerzstand).